

子どもの成長状態、子どもに対する親のあつかい方など、一人ひとりの子どもの様子を知ることができた。特に農村という特色ある地方の幼児が、遊びの上では幼児の遊びをしているにもかかわらず、仕事の面では、もはや一人前の働き手として、おおいに家の仕事に役立っていることにおどろく。

ケースワークの手がかり、保育上の反省など、明日の保育計画の足がかりになった。
(大金抄録124—128頁)

生活経験発表記録の一考察

鶯谷さくら幼稚園 松村光子

梅村和子

本研究は、幼稚園と家庭との連絡を密にして、保育の効果を高め、言語指導に役立てる目的で、三年間に亘って行なった、実践記録をもとにしたものである。

研究方法

- (一)、毎週月曜日に「日曜日の経験」の発表を子どもたちに行ってもらい、それを記録した。(昭和三三年度。一七八名。十八回)(昭和三四年度。一三二名。十四回)(昭和三五年度。一三〇名。十七回)。
- (二)、記録した発表を連絡帖に記入し、各家庭にわたす。
- (三)、家庭にいらせた記録には、次のような、(イ)～(ウ)の質問事項を、毎回貼布して評価してもらい、園でそれを記録整理し、まとめた。
- (イ)全部本当にあったことを話している。
- (ロ)大体正しいが一部まちがっている。

- (ハ)一部分正しいが殆んどまちがっている。
- (ニ)以前にあったこと(したこと)を話している。
- (ホ)全然なかったことを話している。
- (ヘ)その他()

発表目的

子どもの経験発表と母親の評価を中心として、子どもがどのよう
に前日の経験(過去経験)を把握し、表現するものであるかを明らかにし、保育者に役立つ実践研究の効果についてのべる。

結果の考察

生活経験発表記録の評価を整理した結果、次のような諸点が明らかになった。即ち、(イ)の項目に関しては、年長児が年少児より多く(女子の方が男子よりも多く)年長児の方が過去経験を正しく話すことを示している。(別表参照) (ロ)および(ハ)については、(イ)の値の多いとき、対照的に少なくなり、その変動の仕方から、保育の進むことが、過去表現の不完全さを減少させていくものと考えられる。(ニ)については、各年令児の男女を通じて五月に若干みられる。これは、五月が生活経験発表を開始した月であり、昨日と以前の経験の区別がつきにくいことを示す。年長の男女では、九月を境に、これがなくなっているが、年少児は、断続的に一月までみられる。(ホ)については、空想し、創作している子どもが女子にやや多く、時間や、場所の規定性の弱いことを示している。(ウ)および不明の項目では、この評価に対する親の関心および理解協力の態度を知ることができ。

実践研究の効果

- (一)園と家庭との連絡を密にすることができた。
- (二)幼児の経験発表に対する認識が、保護者と保育者の両方に深ま

〔生活発表会の統計〕

1960年度 年少組 男子

| | 5月 | 6月 | 7月 | 9月 | 10月 | 11月 | 12月 | 1月 | 平均 |
|----|------|-------|-------|-------|-------|-------|-------|-------|-------|
| イ | 63% | 55.8% | 54.7% | 58.5% | 68.4% | 59.2% | 52.2% | 67.5% | 61.3% |
| ロ | 15.2 | 17.3 | 7.5 | 9.5 | 10.1 | 3.7 | 13.0 | 10.4 | 10.5 |
| ハ | 4.4 | 3.8 | 5.7 | 3.7 | 0 | 1.9 | 0 | 0 | 2.3 |
| ニ | 6.5 | 9.6 | 5.7 | 7.5 | 2.5 | 3.7 | 4.4 | 5.2 | 5.5 |
| ホ | 0 | 0 | 1.9 | 0 | 0 | 1.9 | 0 | 0 | 0.5 |
| ヘ | 4.4 | 0 | 3.7 | 0 | 0 | 1.9 | 8.7 | 0 | 1.6 |
| 不明 | 6.5 | 13.5 | 20.8 | 20.8 | 19.0 | 27.7 | 21.7 | 16.9 | 18.3 |

1960年度 年少組 女子

| | 5月 | 6月 | 7月 | 9月 | 10月 | 11月 | 12月 | 1月 | 平均 |
|----|-------|-------|-------|-------|-------|-------|-------|-------|-------|
| イ | 52.8% | 48.7% | 66.7% | 55.5% | 67.9% | 60.5% | 64.8% | 58.9% | 59.7% |
| ロ | 25.0 | 24.3% | 16.7 | 22.2 | 12.5 | 15.8 | 17.6 | 10.7 | 17.3 |
| ハ | 2.8 | 0 | 0 | 2.8 | 1.8 | 5.3 | 0 | 0 | 1.6 |
| ニ | 8.3 | 2.7 | 0 | 2.8 | 1.8 | 0 | 0 | 1.8 | 2.2 |
| ホ | 0 | 0 | 2.8 | 0 | 0 | 0 | 0 | 3.6 | 1.0 |
| ヘ | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 |
| 不明 | 11.1 | 24.3 | 13.8 | 16.7 | 16.0 | 18.4 | 17.6 | 25.0 | 18.2 |

1960年度 年長組 男子

| | 5月 | 6月 | 7月 | 9月 | 10月 | 11月 | 12月 | 1月 | 平均 |
|----|-------|-------|-------|-------|-------|-------|-------|-------|-------|
| イ | 61.3% | 82.5% | 72.2% | 71.2% | 68.5% | 71.6% | 69.0% | 64.2% | 70.5% |
| ロ | 20.0 | 7.5 | 5.6 | 18.2 | 17.1 | 13.5 | 17.2 | 10.4 | 13.7 |
| ハ | 1.3 | 0 | 1.4 | 0 | 0.9 | 1.4 | 3.4 | 1.9 | 1.3 |
| ニ | 3.8 | 1.3 | 1.4 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0.8 |
| ホ | 0 | 0 | 0 | 0 | 0.9 | 0 | 0 | 0 | 0.1 |
| ヘ | 5.0 | 2.5 | 2.8 | 3.3 | 0.9 | 2.7 | 3.4 | 0.9 | 2.7 |
| 不明 | 8.8 | 6.3 | 16.7 | 7.6 | 11.7 | 10.8 | 6.9 | 22.6 | 11.4 |

1960年度 年長組 女子

| | 5月 | 6月 | 7月 | 9月 | 10月 | 11月 | 12月 | 1月 | 平均 |
|----|-------|-------|-------|-------|-------|-------|-------|-------|-------|
| イ | 81.3% | 84.4% | 79.7% | 85.5% | 86.7% | 83.6% | 83.8% | 77.1% | 82.7% |
| ロ | 7.5 | 13.0 | 8.1 | 5.8 | 5.8 | 6.6 | 13.5 | 6.3 | 8.3 |
| ハ | 0 | 0 | 0 | 0 | 0.8 | 1.6 | 0 | 0 | 0.2 |
| ニ | 2.5 | 0 | 0 | 1.4 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0.5 |
| ホ | 0 | 0 | 0 | 1.4 | 0.8 | 0 | 0 | 1.0 | 0.4 |
| ヘ | 5.0 | 0 | 0.6 | 0 | 0.8 | 1.6 | 0 | 1.0 | 1.4 |
| 不明 | 3.8 | 2.6 | 11.0 | 5.8 | 5.0 | 6.6 | 2.7 | 14.6 | 6.2 |

り、両者間で、子どもへの共通の理解が高まってきた。
 (三)家庭からは次のような報告があった。家庭生活への反省ができたこと。子どもの心の発達をすることができたこと。生活経験を話せることをよろこぶようになったことなど。
 (四)保育者にとっては、継続研究をすることによって、子どもの個性や個人差を知り、言語面のみでなく、種々の面での指導の手がかりを得ることができた。

(五)子どもの話した内容からは、過去の把握の仕方、伝達の仕方、こ

とばのつかい方(流行語とか幼児語)語いの増加。経験内容の種類(現代の都会生活、世相の反映)人間関係の発達の仕方など、その年令差、性差などを考察することができた。
 (六)当初、友だちの前で話せなかった子どもも、回を重ねることに話せるようになり、次第に自分の経験を順序正しく、考えながら、くわしく話すことができるようになり、言語指導に役立てることができた。
 (大会抄録129―134頁)